
ハイスクールD×D 兵藤家の妹?

秘密の君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D 兵藤家の妹？

【Nコード】

N6834Z

【作者名】

秘密の君

【あらすじ】

兵藤家に妹がいたらどうなっているのか、と妄想して書いてみました。処女作なので、至らぬ点が多く、お見苦しい部分も多いと思いますが、どうぞよろしく願います。

1・とある兄妹の朝の風景（前書き）

はじめまして。秘密の君です。

今回は、今まで妄想どまりだったネタを使ってみたく始めました。
更新はなるべく早く書くようにします。

主人公は兵藤 毬（16）です。

それでは、私が作り出した「ハイスクールD×D」の世界をお楽しみください。

1・とある兄妹の朝の風景

「眩しい……」

私はベッドの上でつぶやいた。朝日がとても眩しい。

とりあえず、ベッドから降りていつも通りお兄ちゃんを起こしに行く。

お兄ちゃんの部屋のドアを開け放つ。

「お兄ちゃん。あつさだよ。」

「ん……。あと5時間。」

「学校遅れるよ。」

反応がない。

「仕方がないな。」

そう言っ私は部屋のいたるところに隠してある工口本を取り出し、

「さて、捨てよう。今起きたすぐ起きた！！だから慈悲を。」（泣）

「

いつもこうやらないとお兄ちゃんは起きないんだよね（笑）

「わかったから、なかないですよ。お兄ちゃん？」

私はウインクしながら言う。そうするとお兄ちゃんは安堵の息を吐いて

「いつも思うんだが、毬はどうやって見つけてるんだ？」

「ふっふっふっ。お兄ちゃんの隠し事なんて私の前では無意味なのだよ！」

「な、なんだって……！」

実は、盗聴器と隠しカメラを設置しているだけなんだけどねー。そのとは知らずに

「何ということだ……。では、どうすれば……。ぶつぶつ……。とお兄ちゃんつぶやいている。

「早くしないと遅れるよ。」

「ああ、そうだな。」

と、お兄ちゃんと一緒に一階に降りる。あ、そうだ。

「お兄ちゃん。今度の休日買い物つきあってくれない？」

「あゝ。ごめん！俺その日デートがあつて……。」

ビシッ。と、私の周りの空気が凍る。そうとも知らずお兄ちゃんは話を続ける。

「いやゝ。この前告られてさ。すつつつつつげええ嬉しくて即OK出しちゃったよ。ハハハ。」

お兄ちゃんはすぐくうれしそうだ……。うん。決めた。

「その人の名前教えてくれないかなお兄ちゃん。」

「ええつとな、天野 夕麻ちゃんつうんだ。」

ふゝん。ちゃん付け……。よし。

「殺そう。」

「いきなり何言つてんだ!？」

しまった。つい声に出してしまった。

「大丈夫だよ。その人とは永久に会えなくなるだけだから。」

「いやいやいや。大丈夫じゃねーだろ!? 落ち着け早まるな!」

「お兄ちゃんをたぶらかす悪魔に死の鉄槌を……。」

「頼むから、頼むから落ち着いてくれ！俺の初恋なんだ。奪わないでくれ！頼むから!」

私はその言葉に泣きたくなかった。

「うう……。」

「えっ!？あゝ。ごめんな……。 (よくわからんが謝るのが吉と

みた!)」

「ぐすつ……。 お兄ちゃんはその人のこと大好き？」

「え？あ、ああ。」

そんなに思ってるんだ。じゃあ仕方ないね……。

「うん。わかった。少しパニックただけだから……。」

「そ、そうか(元気なくなってるな……。そうだっ!) じゃあ今度

一緒に買い物行こうぜ!」

「えっ?」

「だからさ元氣出してくれよ。な？お前が悲しそうな見たくねえんだよ……。」（理由はわからんが……。）」
たぶん、原因が自分だって気付いてないんだろうな……。でも・

「うんわかった。」

心配してくれたし嬉しいからいいっか。

「でも、譲りはしないからね……。」

だったら、こっちに振り向かせるまでのこと!!

「ん？なにぶつぶついつてるんだ？」

「な、なんでもない！（汗）」

「？」

よかった気付かれなかった。

「さてそろそろ行くか。」

「あつ。待つてお兄ちゃん！」

そうして私たちは学校へ向かった。

私たちの運命の歯車はこの日を境に狂ってしまった。

1・とある兄妹の朝の風景（後書き）

毬「少し…寂しいな。」

君「まあ。落ち着いて。」

毬「で、次回はお兄ちゃんと彼女さんのデートの話なんだよね?」

君「さあてね。（怪しい笑み）」

毬「え!? 違うの!? どうなるのよー!?」

君「次回、『闇に伏せる兄妹』お楽しみに」

毬「こたえろー!」

2・闇に伏せる兄妹（前書き）

さて、2話目です。

そこまで進んでいません。

できたら、感想などをお願いします。

ふさいでもこの威力。どつからそんなに声が出てくるのだろうか？
お兄ちゃんは・・・あ、くらくらしてる大丈夫かな？

「ばかな！エロさNo.1のお前がそんな馬鹿なー！！」

「神はいない。神はいなくなってしまうんだ・・・」
と二人ともorz状態になってしまった。

信じたくないんだろうな。あ、教室ついたし授業の準備しようっと。

「まあ、負け組は負け組らしく吠えてやがれ。はっはっはっ。」

「死ね！！！！」

廊下で騒いでいる。うるさいなあ。

さてと授業授業っと。

（休日）

お兄ちゃんのデートをつけてみたけど、お兄ちゃんの彼女は意外にもかわいい子だった・・・。

確かにあれなら惚れても仕方ない気がする。

お兄ちゃんのこと奪えるかなあ・・・。

あれ、公園に入った。何するんだろう？

・・・はっ！まさかキス！？それは許さん私が許さん！

私は公園の茂みに隠れてすぐに妨害できるように準備した。

二人の声が聞こえてくる。

「ねえ、死んでくれないかな？」

・・・は？何言ってるのあの子？私の聞き間違いかな？

お兄ちゃんもそう思ったらしく、

「・・・え？ その・・・あれ？ ゴメン、もう一度言ってくれな

い？ ちよつと緊張して聞き取れなかったよ、はっはっは」

「死んでくれないかな？」

バサッ

私は飛びかかるうとする。

「殺す……。殺してやる!！」

「あはつ。残念、それ無理。」

彼女は笑顔でそう言い光の槍を投げつけた。
かわせない。

グサツ

「ごぶつ……。」「

やられた……。?でも、倒れない。倒れてやらない!

「あら?立っていられるなんてすごいわね。でも、もう無理でしょ?うふふ。」

そう言つて彼女は闇の中に消えていった。

その声を聞いて私の意識は遠のいた。

その瞬間、私の視界に紅の髪が入った。

そして声が聞こえた。

「死にそうね、傷は……。へえ、おもしろいことになっているじゃないの。あなたたちがねえ……。おもしろいわ」

意識はそこで遠のいた。

そして私はその日、人間の死を迎えた。

2・闇に伏せる兄妹（後書き）

毬「え！？死んじやったよ！私達死んじやったよ！？」

君「そうだね〜。（にやにや）」

毬「え？何？何なの？」

君「まあ、次回を楽しみに・・・。」

毬「すごく気になるのにー！」

3 ・兄と妹との魔の道（前書き）

さて、一日の内に三話目を更新することができました。

まあ、いつもの如くあまり進んでないんですがね。

明日にはオカルト研究部のところまで行きたいな・・・。

3・兄と妹との魔の道

マリside・・・

「う・・・ん・・・」

私は目覚まし時計の音で起きた。

いつもはすぐにおきれるのに、近頃は朝がめっぽう弱くなった。何でだろう？

「さてと、ほんとに起きないと。お兄ちゃんも朝がさらに弱くなっ
たし。」

そう呟きながら、私はお兄ちゃんの部屋へ向かった。

昨日はエロ三人組のメンバーと一緒に何かやっていたらしい。

何をやっていたかは簡単にわかってしまうのが少しかなしいけどね・・・。

ずいぶんと夜遅くまでいたらしいからいつ帰ってきたかわからなかった。

「おつはよー。お兄ちゃん？」

私はお兄ちゃんの部屋のドアを開け放った。

そして見てしまった。

裸のお兄ちゃんと紅髪の女性を。

イツセイside・・・

き、聞いてくれ！俺酒飲んだりしてなかったはずなんだ。（当然の
如く）

それなのに、隣に俺の憧れの女性、リアス・グレモリー先輩が寝て
いたんだ！

う、嘘だろ・・・。記憶にないのに俺は初体験してしまったのか!？

「な、何たる不幸・・・」

「ん・・・」

ああー！ー！どうしよう！

「ん・・・。あら、あなたもう起きてたの？」

っ！！お、お姉さま！お胸が見えていらっしやるのですが！？

俺は毛布で下半身を隠しながら床に座った。

「あ、あの、お胸が見えていらっしやるのですが？」

「あら、見たければ見てもいいわよ。」

っ！！なん・・・だと・・・。

日本語にそんな素敵な言葉があつたのか！？

鼻血が出そうだ。

「で、でもなぜここにいますか？」

「あなた、昨日のこと覚えてない？」

え？昨日のこと？

確か、悪友二人と一緒にエロDVDと一緒に見てて、なぜ俺らに彼女ができないのか、という話になり時間が遅くなって、一人で帰り道を歩いていて・・・

「確か、変な男とあって・・・そうだ！夕麻ちゃんと同じような翼が生えていて、俺の腹に光の槍みたいなのを・・・。つて、あれ？傷は？」

「私が駆け付けなかったら、あなたは今頃無となっていたわよ。傷は深かったから私がここまで運んで魔力で治してたつてわけ。」

「そ、そうなんですか？て言うか何で裸なんですか？それにあの男は何者なんですか！？」

「えーと。まず前者の質問。魔力が裸のほうに渡しやすいため。で、後者の質問は、あいつらは墮天使。

欲に負けて天使から墮ちたもの達よ。」

な、何を言ってるんだこの人は！？

「まあ、詳しいことは学校で話すわ。後で使いを出しておくから。」
先輩がそういつた瞬間俺の部屋のドアが開け放たれ、

「おっはよー。お兄ちゃん？」
と言いながら毬が入ってきた。

ビシッ

その瞬間、空気が凍った。

リアス先輩は気にしていない様子だが毬のほうからドス黒いオーラの様なものが、

(や、やばい……)

俺は滝のように冷や汗をかいている。

「お兄ちゃん。かのひとはだれかなあ〜？そして何をしていたのかなあ〜？(怒)」

「ひつ。い、いや毬落ち着け。な？」

「私はリアス・グレモリー。あなたたちと同じ私立駒王学院の三年よ。それに裸で抱き合っていただけよ。」

せ、先輩！色々とはしより過ぎです！

ああ、毬からさらに黒いオーラが！

「こんの……。どろぼうねこがあー！！！！！！！！！
ま、毬が先輩に襲いかかっている！危ない！！」

ヒラリ。

「へぶっ」

おお、先輩は華麗にかわしている！

そして毬はベッドに頭から突っ込んでいるぞ！

「あなたたちに言っておくわよ。」

「何だ！この泥棒猫！！」

「お、落ち着け毬！」

俺は毬を羽交い絞めにした。そうしないといつ飛びかかるかわから

ないからな。

先輩は制服に着替えた後、驚くべきことを言った。

「あなたたちは、一度死んでるわ。転生して悪魔になったのよ。」

3・兄と妹との魔の道（後書き）

毬「何よこの泥棒猫！ガルルル・・・」

君「ま、まあ。落ち着きたまえ。（ダラダラ）」

毬「お兄ちゃんの貞操を・・・許さない・・・。」

君「まあ、あまりにも怖いので次回予告『悪魔達の喧騒』」

毬「お楽しみに？ あの女・・・ぶち殺しかくていね」

君「ひいっ」

4・悪魔達の喧騒(前書き)

さてついに毬の神器が姿を現しました。

いつもより多く描いたの絵少し疲れています。
今日中にもう一話いけたらいいな

4・悪魔達の喧騒

Mariside・・・

・・・は？

何を言ってるのこの人？頭がおかしくなったの？

お兄ちゃんもどう反応すればいいのかわからないのかポカンとして
いる。

私たちを気にせずにリアス先輩は、

「まあ、さつきも言っただけけど、詳しいことは学校でね。」
と、言いながら鞆を持つ。

「あなた達、早くしないと遅れるわよ。」

あ・・・、

「ヤバイ！早くしないと遅れちゃうよ。お兄ちゃん！」「お、おう
！そうだな。」

そっいいながら、私たちは急いで準備をする。

この後、一階でお母さんとお父さんが騒いだのはいうまでもない。

「「いつてきまーす。」」

そう言っつて、私たちは玄関から飛び出ていった。

・・・あの泥棒猫もいたけど。

〈学校〉

まあ、登校中もいろんな人が騒いでいた。

エロ三人組のメンバーの二人ももちろんからんできた。

お兄ちゃんはその二人に興味ありげな笑顔で、

「なあ、生乳って見たことあるか？」

と言っていた。

あの女・・・。

どうしてくれるようか……。

そうだなあ、まずは気絶させてそこから色々と世間に公表できないようなことをしまくって……。

「セメント……太平洋沖……沈める……ブツブツ……」

「お、おい毬さん？どうしてそんな危険なフレーズをつぶやいているのでせうか？（ビクビク）」

あれ？気付くと私の周りからみんな2メートルくらい離れてこちらを見ている。

お兄ちゃんもその中にいたので、

「どうしたのお兄ちゃん？」

私は最上級の笑顔で聞いてみる。

「あ、ああ。よかった。いつもの毬だ……。」

とお兄ちゃんは、安堵の息をついている。

どうしたのかな？

そのまま学校に着いた。

あの泥棒女はさっさと行ってしまっていなくなってただけだね。

イツセイ side……

さっきの毬は阿修羅に見えてしまった。

本当に怖かったな……（汗）

まあ、そんなこんなで今は放課後になってしまった。

先輩が言っていたことが気になって、授業がまともに頭に入らなかった。

しばらく待つと、

「兵藤 一誠君と、毬さん。いるかな。」

声のしたほうを向くとうちの学校で人気のイケメン木場 祐斗がたっていた。

うちのクラスの女子がいろいろと騒いでいる。

「「「「「キヤー！木場くううん！」「」「」「」

くそっ、イケメン死ね！！

俺はとりあえず木場のもとへ向かった。

Mariside・・・

木場という人が私たちを呼んでいた。多分、リアス先輩の使いとは彼のことなのだろう。

お兄ちゃんは、

「何のようだ。」

と実に、不機嫌そうに木場君に話しかけた。

お兄ちゃんはイケメン嫌いだからね。

木場君は気分を害した様子はなく、

「ええとね、リアス・グレモリー先輩の使いで「OK、OK。すぐ行くよ」

お兄ちゃん・・・。そこまで先輩のことがいいのかな？

どうすればいいかな・・・あの女からこっちに振り向かせるためには？

とりあえず、木場君の後をついて行くと、

「汚れてしまっわ、木場君！」

「木場君×兵藤なんてカップリングは許せない！」

「あの女木場君と・・・ブツブツ」

と、腐った視線と殺意がこもった視線が私たちに向って放たれている。

木場君と私は無視しているが、お兄ちゃんはゲッソリしている。

理由は腐った視線のせいだろう。

しばらく歩いていると洋館みたいな建物が見えてきた。

「ここに部長がいるんだよ。」

そう言いながら中に入っていく。

上に看板の様なものがあり、オカルト研究部と書かれていた。

中には、映画に出てくるような魔術の道具やら、魔法陣が書かれて

いた。

さらにソファー、デスクがいくつもあり、ソファーに誰かが座っていた。

ん？あれって確か・・・思い出した。

「ども・・・」

と言いながら手に持った羊羹を食べていた。

確か名前は塔城 子猫さんだったはず・・・。

「こんにちは。」

と私は笑顔であいさつし返した。

そういえば、さっきからシャワーの音がする。

よく見てみると部屋の中にシャワーがありタオルの向こうから誰かが浴びているのが見える・・・。

・・・っは！？しまった！お兄ちゃんが凝視している！

とりあえず私は急いで目隠しをした。

向こうから話し声が聞こえる。

片方はあの女だが、もうひとつは確か姫島 朱乃先輩だったかな？

そして二人とも出てくる。

私はお兄ちゃんの目隠しをとる。お兄ちゃんは少し残念そうな顔を
して、

「毬、何で目隠ししたんだ？」

と聞いてきたので、

「お兄ちゃんが、いやらしい目つきしてたから。」

そう言つと子猫さんが同意するようにウンウンとうなずいていた。

「あらあら、はじめまして、私、姫城朱乃と申します。どうぞ、以後、お見知りおきを。」

と笑顔であいさつされた。

「さて、もう知っているとは思いますが私はリアス・グレモリー。

この部の部長よ。」

そう言つと、

「これで全員そろったわね。兵藤 毬さん。一誠君。いえ、マリと

イツセーと呼ばせてもらおうわ。」

「は、はい。」

「はい。」

まあ、別にどう呼ぼうとかまいませんが・・・

「私たちは、あなた達を歓迎するわ。」

「え、あ。はい。」

「はい。」

お兄ちゃんは、たどたどしく答えるので精一杯らしい。
そう考えていると、

「悪魔としてね。」

爆弾発言をされた。

イツセーside・・・

そのあと、朱乃さんから、お茶をもらい、色々な話を聞いた。

なんでも、墮天使と悪魔は地獄の覇権を争っているとか、墮天使と悪魔を問答無用に襲いかける天使。

しかも女子と付き合っているとか夢が本当だったとか。

しかも、女子と付き合っていた子が墮天使とか、俺たちが殺されそうになったのは神器を持っていたから。

昨日襲われた話を聞いたとき、毬が

「お兄ちゃんを殺そうとするなんて・・・万死に値するねそいつら

・・・。」

と、少し危ない発言をしていた。

皆さんが少し驚いてるよ。

「ブツブツ・・・。」

毬は何かつぶやいている。その中、

「ねえ、イツセー。マリどうしちゃったの?」

と、聞いてきた。

「へ？ありませんけど・・・？」

「そうなの？おかしいわね・・・。」

「あのどうかしたんですか？私。」

そんなに真剣になられると逆に怖い。

そう思っていると、朱乃先輩が、

「悪魔にとつて、聖なる道具という物は弱点の様なものなのですね。十字架も悪魔には触っただけで激痛を及ぼす代物のはずなのですが・・・。」

つまりは、私は神器とはいえ十字架を触れて激痛を感じないおかしな状態にいると・・・。

「ヤバいんですかね・・・？私。」

少し怖くなってしまった。すると、お兄ちゃんが私の首に付いている十字架のネックレスに触れてきた。

「お、お兄ちゃん！？」

「部長。俺が触っても激痛起りませんし、この十字架が特別なだけなのではないでしょうか？」

お兄ちゃんがそう言うのと、

「そうなのかしら？でも、そうなのかもしれないわね。」
とみんな納得してくれた。

「ありがとう。お兄ちゃん？」
ところで、

「そう言えばどうしてリアス部長は私たちが死んでるって気付いたんですか？」

そう聞くと、

「それはコレのおかげよ。」

と、一枚の紙を取り出した。

その紙には、こう書かれてた。

『あなたの願い叶えます！』

そんな謳い文句と奇妙な魔法陣の描かれたチラシだった。

「これ、私たちが配っているチラシなのよ。これは、私たち悪魔を

召喚するためのもの。最近魔方陣を書くまでして悪魔を呼ぶ人はいないにの。こうして、チラシとして、悪魔を召喚しそうな人間に配っているの。あの日私たちの使い魔が繁華街でチラシを配っていたの。それをイツセーが手にした。そして、墮天使攻撃されたイツセーは私を呼んだの。私を呼ぶほど願いが強かったんでしょね。普段なら眷属の朱乃呼ばれるんだけど」

そうだったんだ・・・。

「召喚された私はあなたを見てすぐに神器所有者で墮天使に害されたのだと察したわ。イツセーとマリは死ぬ寸前だった。そこで私はあなたの命を救うことにしたの。悪魔としてね。あなたは私の眷属として生まれ変わったわ。」

へえ〜なるほどね。

「じゃあ、ひと段落ついたところで、改めて、紹介するわね。裕斗」

「僕は木場裕斗。イツセ 君とマリちゃんと同じ二年生ってことはわかってるよね。僕もあくまです」

「・・・一年生。・・・塔城子猫です。・・・悪魔です」

「三年生、姫島朱乃ですわ。今後よろしくお願いします。これでも悪魔ですわ。うふふ」

「そして、私が彼らの主であり、悪魔であるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、マリ、イツセー」
その言葉に私たちは、

「「はいっ!!」「」

と大きな声で返事をした。

4・悪魔達の喧騒（後書き）

毬「私の神器おかしいじゃない！作者どうしてくれるのよ！」

君「おいおい、それは間違っている。」

毬「それはどう意味よ！」

君「それはまたいつか。次回『悪魔とシスター』悪と聖が交わりと
き物語は始まる。」

毬「パクってんじゃないわよ！！！」

君「へぶっ」

5・悪魔とシスター（前書き）

bag bag です。

いやー酷いー！

さらに入たくそになった気がします。

5・悪魔とシスター

Mariside・・・

「さて、紹介も終えたし次は悪魔について詳しく話そうかしら。」
リアス部長は、そう言うのと私たちを見て、

「まず、悪魔の中ではあなた達は転生悪魔の部類に入るの。たいていは下僕としてひどい扱いを受けてしまうわ。私はそのような扱いにはしないけどね。」

「なぜですか？」

そう聞くと、部長の代わりに木場君が答えてくれた。

「それはね、部長の家のグレモリー家は悪魔の中では少ない眷属を大切にする悪魔なんだ。だから、僕たちはこの人に会えてよかったと言えるよ。」

「へえ〜そうなんですか・・・。」

じゃあ私たちはラッキーなんだ。

少しうれしいな

少し浮かれていると

「でもね、悪魔には階級があるの。爵位っていうのがね。私も持っているわ。これは生まれや育ちにも関係するけど、成り上がりの悪魔だっているわ。最初は皆、素人だったわ」

あ、やっぱりそうなんだ。みんな1からのスタートなんだね。

お兄ちゃんは不服そうにしていると、

「やり方しいでは、モテモテな人生も送れるかもしれないわよ？」
と、リアス部長が爆弾発言をした。

もちろんお兄ちゃんは、

「どうやってですか!？」

即座に反応した。あまりの反応の速さに、反射の域にいつているね。皆、お兄ちゃんの反応の速さに少し驚いていた。

リアス部長は、

「純粋な悪魔は昔の戦争で多くが亡くなってしまったのよ。そのため、悪魔は必然的に下僕をあつめるようになったの。まあ、以前のような軍勢を率いるほどの力も威厳も消失してしまっただけね。それでも新しい悪魔を増やさないといけなくなった。悪魔にも人間同様に性別はあるから悪魔の男女の間に子供は生まれるわ。それでも自然出産で元の数に戻るには相当な時間がかかってしまうの。悪魔という存在は極端に出生率が低いから。それでは墮天使に対応できない。そこで素質のありそうな人間を悪魔に引き込むことにしたわけ。下僕としてね」

と続けた。

あれ？結局下僕じゃないですか。

「もう、そんな残念な顔をしないで。話はここから。ただそれでは下僕を増やすだけで力のありそうな悪魔を再び存在させることにはならない。だから、悪魔は新しい制度を取り入れたわ。力のある転生者　つまり、人間から悪魔になった者にもチャンスを与えるようになったのよ。力さえあれば、転生者でも爵位を授けよう　と。

そのせいもあって、世間に割と悪魔は多いわ。私たちがみたいに人間社会に潜り込んで行動している悪魔も少なくないしね。イツセーやマリも知らず知らずのうちに悪魔と町中ですれ違っていたと思うわえ！？そうだったの！？私も気づかず悪魔とすれ違っていたりしたんだ。

少し怖い……。

「ええ。もっとも、認知できる者とできない者がいるわ。欲望が強い者や悪魔の手でも借りたいほど困っている人間は悪魔に強く認識しやすいわね。そういう人たちに魔法陣つきのチラシを配ると私たちが召喚されやすいのよ。悪魔を認知できても、先ほどのイツセーのように私たちの存在を信じない者も多いけど、魔力を見せれば大抵は信じるわ」

そうかもね。私はすぐ信じたけど。

「じゃ、じゃあ！やり方次第では俺も爵位を！？」

「ええ。不可能じゃないわ。もちろん、それ相応の努力と年月がかかるでしょうけど」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ！！」

うわっ！いきなり叫んでびっくりするじゃん。

「どうしたのお兄ちゃん？」

でもお兄ちゃんは、聞こえてないらしく、

「マジか！俺が！俺がハーレムを作れる！？エ、エツチなことしてもいいんですよね！？」

お兄ちゃん……。そこまでだと、流石にひくよ。私でも。

「そうね。あなたの下僕ならいいんじゃないかしら」

あ！リアス部長！火に油を注がないで下さいよ！

お兄ちゃんが止まりそうもなくなってきた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ！！悪魔、最高じゃねえか！何、これ！何、これ！チョーテンション上がったよ！いまなら秘蔵の工口本も捨てられ」

「え！本当！じゃあ早く家に帰って、捨て「いや、工口本はダメだ。アレはダメだ。俺の宝だ。お袋に見つけられるまではやっていける

！それとこれは別だ。うん、別だ！だから捨てない！前言撤回！」

ええー。」

せつかく、あのHな本を捨てたりできると思ってた喜んだのに。

そう思っていると、

「フフ。おもしろいわ、この子」

「そうですか？」

うーん。面白いかな？

まあ、これもお兄ちゃんの魅力の一つだけだね。

「あらあら。部長が先ほどおっしゃっておられた通りですわね。『おバカな弟としっかり者の妹ができたかも』だなんて。」

そういう風にリアス部長の目には映ってたのかあ。

まあ、否定はしないけど。

「いや、否定しろよ!」

「うわっ!いきなり私の思考を読まないでよ!お兄ちゃんとはいえ
プライバシーの侵害だよ!」

「う・・・すまん・・・」

「よし許す!」

あゝ楽し

「というわけで、イツセー、マリ。私の下僕というわけでいいわね
?大丈夫、実力があるならいずれ頭角を表すわ。そして、爵位を
めらえるかもしれない」

「はい、リアス先輩!」

「違うわ。私のことは『部長』とよぶこと」

「部長ですか?」お姉さま『じゃダメですか?』

「お兄ちゃん・・・はあ。」

「何のため息つくんだよ毬?」

「別に。」

お兄ちゃん。そんなに部長のことが好きなのかな・・・。

「うーん。それも素敵だけれど、私はこの学校を中心に活動してい
るから、やはり部長のほうがつくりくるわ。いちおう、オカルト
研究部だから。その呼び名でみんなも呼んでくれてるいるしね」

「わかりました!では、部長!俺に『悪魔』を教えてください!」

お兄ちゃん・・・。動機が不純すぎ。

「フッフ、いい返事ね。いい子よ、イツセー。いいわ、私があなた
を男にしてあげるわ」

とってお兄ちゃんのおごをなでるリアス部長。

「部長!お兄ちゃんの貞操は妹の私を通してからにしてください!
さすがにそこは譲れない!譲っちゃいけない!」

そう叫んでリアス部長と、お兄ちゃんを離れた。

お兄ちゃんは、

「ハーレム王に俺はなるっ！」
と叫んだ。

「はあ……。」

これからは苦勞が多そう……。

イツセイ side・・・

その後、部長から悪魔の基本的な事を教わった。
まず、集まりは旧校舎のオカルト研究部の部室。時刻は深夜。
なんで夜中かというところの方が悪魔の力が発揮されるからだそう
だ。

悪魔だから闇の世界になると力が増すらしい。

だから、夜になると色々強くなった感覚があったのか。

あと、朝がさらに弱くなった理由も悪魔になったからだそうだ。

悪魔は光を嫌う。光が強いと体に悪いらしい。

俺と毬が朝が弱くなった理由も悪魔に転生したただから日の光に慣
れていなかったかららしい。

ついで、俺も毬も悪魔になって日が浅いから、まず悪魔社会の仕組
みについて勉強しないといけないらしい。

あ、あとは学園についてだ。

俺の通ってる駒王学園は部長の領土になってるらしい。

学園の偉い人たちも悪魔関係者でグレモリー家に頭があがらない。

つまり学園は部長の私物みたいな感じだ。

そのおかげで夜中に学園に集まれるんだな。

そして話はチラシ配りになるんだが、魔法陣がかかれたチラシを謎
の機械で点滅してるお宅に届ける。

この謎の機械なんだが、悪魔の科学が生んだ秘密道具らしい。毬が
某ネコ型ロボットのようにな音を口ずさんでいた。

携帯ゲーム機似でそれプラスチックパネル式だ。

なんか、悪魔ごとに人間界で活動できる範囲は決まってるらしくて、

その範囲内でしか仕事。

つまり、人間との契約で相手の願いを叶えることだ。

代償としてお金や物、最悪命をもらうらしい。命をもらうの部分で毬は震えていた。

毬は怖いもの苦手だからな。

で、この謎の機械に点滅してるところが欲が強い人間がいる家なんだ。

それから悪魔の活動時間はよるだけらしい。なんでも昼は神やら天使やらの時間なんだというこだ。

チラシは使い捨てらしいから、味をしめた人間が悪魔に願いを叶えなくなったらまたポストに入れに行かないといけない。

だから今、俺と毬は自電車で走り回っている。

つらいが、これもハーレムのため！

「うおおおおおおおおお！！！！」

ある日の放課後

「失礼しま〜す」

俺たちはいつも通り、部室へ入って行った。

「来たわね」

部長が俺たちを見たたん、朱乃さんに指示をしていた。何だろうか？

「はい、部長。じゃあまずはイツセーくん、魔法陣の中央へきてください」

「え？あ、はい。」

俺は、恐る恐る魔法陣の中に進む。

「イツセー、マリ。あなた達のチラシ配りはもう終わり。よくがんばったわね」

笑顔でいってくる部長。おおーやっと終わったのか！毬もうれしそ

うにしている。

「改めて、あなた達にも悪魔としての仕事を本格的に始動してもらおう。」

「おおっ！俺達も契約取りですか！」

「ええ、そうよ。もちろん、初めてだから、レベルの低い契約内容からだけれど。小猫に予約契約が二件入ってしまったの。丁度いいからマリとイツセーにいつてもらおうわ。」

「やった！ついに・・・ついに！俺の願望がかなう時だ！」

俺の足元の魔法陣が光り始めた。

「あ、あの・・・」

「黙っていて、イツセー。朱乃は、いまあなたの刻印を魔法陣に読み込ませているところなの」

「そうなんですか・・・。何かパソコンみたいだな。」

「そういえば、部長が眷属悪魔にとってこの魔法陣は家紋のようなものだって言ってたな。」

「つまり、召喚するもの、契約を結びたいものにとって、これが俺たちを表す記号になる。」

「魔力とやらの発動もこの魔法陣を絡めたものになるんだと。」

「木場たちの体にはこの魔法陣が大小各所に書き込まれていて、魔力の発動と一緒に機能するそうだ。」

「俺や毬はそれよりも先に魔力コントロールから始めないといけないらしい。」

「イツセー、手のひらをこちらに出してちょうだい」

「部長の指示どおりに俺は左手を部長に向ける。」

すると部長が俺の手のひらをなぞる。なぞり終えたら、俺の手が光り出した。

よく見てみると魔法陣のようだ。なるほど、いまのは魔法陣を書いていたのか。

「これは転移用の魔法陣を通して依頼者のもとへ瞬間移動するためのものよ。そして、契約が終わるとこの部屋に戻してくれるわ」

へえー、便利だなあー。これさえあればいろんな所へ行けるわけだ。魔法陣があればの話だけど・・・。

「朱乃、準備いい？」

「はい、部長」

そういつて朱乃さんが魔法陣の中央から離れていく。

「さあイツセー、中央にたつて」

部長にそう促され、俺は中央に立つ。瞬間また強く光り出す魔法陣。

「魔法陣が依頼者に反応しているわ。これからその場所に飛ぶの。到着後のマニュアルは大丈夫よね？」

「はい！」

「いい返事ね。じゃあ、行ってきなさい！」

そして俺の体の周りが輝きだした。

マリside・・・

うわ！お兄ちゃんの体が光ってる！

まぶして見えない。私が腕で目を隠していると光が弱まってきた。

私は魔法陣の方向を見つめる。

・・・え？・・・お兄ちゃん何でいるの？

周りを見ると、リアス部長は額に手をあて、困り顔を浮かべ、朱乃先輩は「あらあら」と残念そうな顔をし、木場君はため息をついていた。

「・・・イツセー」

部長が目を点にしているお兄ちゃんを呼ぶ。

「はい」

お兄ちゃんは何が何だか分からないって顔をしていた。

「残念だけど、あなた、魔法陣を介して依頼者のもとへジャンプできないみたいなの」

え！そんな、なんで！？

「魔法陣は一定の魔力が必要なわけだけど・・・。これはそんなに

高い魔力を有するものではないわ。いいえ、むしろ悪魔なら誰でもできるはず。子供でもね。魔法陣ジャンプなんて初歩の初歩だもの。えーと、その話から考えるとつまり、

「つまり、イツセー、あなたの魔力が子供以下。いえ、低レベルすぎて、魔法陣が反応しないのよ。イツセーの魔力があまりにも低すぎるの」

な、なんだってー！

つまりお兄ちゃんは役立たずということになるよね？

「な、なんじゃそりゃあああ！？」

お兄ちゃん……。私はかわいすぎて泣きたくなつた。

だって、あんなに出世したがってたのに、役立たず認定って……。

「……無様」

ぼそりと無表情で呟く子猫ちゃん。

やめてあげて！かわいそうだから。

すると朱乃先輩が困り顔で部長さんに尋ねる。

「あらあら。困りましたわねえ。どうします、部長」

「イツセー」

「は、はい」

「依頼者がいる以上、待たせるわけにはいかないわ。イツセー！」

「はい！」

「前代未聞だけれど、足で直接現場へ行ってちょうだい」

「あ、足！？」

あ、その手があつたか！

「ええ、チラシ配りと同様に移動して、依頼者宅へ赴くのよ。仕方ないわ。魔力がないんだもの。足りないものはほかの部分で補いなさい」

「チャリですか！？チャリでお宅訪問！？そんな悪魔存在するんですか！？」

ビシッ。

無言で子猫ちゃんが指を指す。

「ほら、いきなさい！契約を取るのが悪魔のお仕事！人間を待たせてはダメよ！」

そう言われてお兄ちゃんは出て行った。

えーと……。

私は？

「あなたは魔法陣で行ってもらわ。」

「え！お兄ちゃんは！？」

「後から来るから大丈夫よ。じゃあ魔法陣の中央に向かって。できたら、お兄ちゃんと一緒に行きたかったなあ。」

リアス部長から魔法陣をもらって、

「マリ。がんばってね。」

「はい！」

そう言つて、私は光に包まれた。
ん……。

あれ？知らない家だ。やった。

「転送できたー！ー！！」

「うわっ！」

あ、いけない大声出しちゃった……。

「えーと、グレモリーの使いの者です。あともう一人後から来ますが、先に用件だけ聞きたいんですが？」

「え！あ、ああ。えーと確か子猫ちゃんに要望したんだけど？」

「あ、すいません。子猫ちゃんに二つ依頼があつてそれで片方に代わりとして私が派遣されました。」

「あ、そうなの。じゃあ、金持ちに出来る？」

「あ、少し待つてください。えーと、それだと対価が命になってしまふんですが、よろしいですか？」

私は最上級の笑顔でそう言った。

「いやいやよくないよ！じゃあ、ハーレムは？」

「えーと、あ、それでも同じですね。」

私は最上級の（ry

「まじかよ……。じゃ、じゃあさ君の体は？」

「ああ、すいません。そう言うのにはそれ担当の悪魔がいますのでそちらに。ついでに言つとそういつこと言つと、魂ごと滅ぼしますよ？」

私は怒気を含めた笑顔で言った。

「ひ、ひい」

あら、すごい怯えてる。

（ピンポーン）

「あ、連れがきたみたいですね。中に入れさせていただきます。」

イツセイ side……

やっと着いた……。

さて中に入るか。

（ピンポーン）

「すいませ〜ん。リアス・グレモ「お兄ちゃん御苦労さま。さ、早く早く！」ま、毬！何でいるんだ!？」

「ん？先に転送してきてたんだ。」

なん……だと……。

「妹に負けた……。」

そのあと色々とおつたが割愛させていただきます。

後日〜

「はあ。」

「お兄ちゃん。過ぎたるは及ばざるがごとしだよ!」
親指を立てて笑顔で言ってきた。

「だってよく契約取れなかったんだぜ。部長には迷惑かけちゃった

し。。。」

「でもさ、一応ほめてくれたじゃん。それで良しとしよつよ！
ね。」

「そうだな。次がんばるか。」

「うんうん。その意気だよ。」

「心配させて悪かったな。」

そう言っつて、俺は毬の頭をなでてやった。

「うにゅ〜。」

毬は目を細めて喜んでる。

（猫みたいだな）

そうやってなでていると、

「ん？あの子。。。」

毬が何か言っているので見ると、

（ここで、劇的ビフォーアフターのテーマ曲を脳内再生してください）

何ということでしょう。そこには、金髪の超美少女がいるではありませんか。

シスター服を着て、少し子供っぽさを残した顔。

そんな子が困っていたらどうします？やることは一つ！

俺は女の子の近くに行き膝をついて、

「何かお困りですか？」

あくまで、紳士的に聞いてみた。

「え、あの〜。近頃こちらに来て、目的地に行こうとしたんですが、そしたら道に迷ってしまっつて。。。」

毬が女の子の持つている髪を見て、

「何だ近くじゃない。ねえ、お兄ちゃん。案内してあげない？」

そう言っつたので、

「そうだな」

と、俺は同意した。女の子は、

「い、いえっ！そんなご迷惑をかけられません。」

と遠慮してきた。

「いいのいいの。旅は道ずれ世は情けつてね。ね、お兄ちゃん。」

「ああ、そうだぞ。遠慮しなくていい。」

そう言つと、

「ありがとうございます。あ、私アーシア・アルジエントと言います。」

「あ、俺、兵藤 一誠。んでこいつは「妹の毬です。」よろしくな。」

「はい。よろしくお願ひします。」

そう言つて俺たちは歩きだした。

しばらくすると、少年が泣いていた。

どうやら、膝をすりむいたらしい。

アーシアは、近づくと、

「大丈夫ですよ。」

と言いながら傷に手をかざした。

すると、淡い緑色の光が発生した。

あれは……、

「神器だよね。お兄ちゃん。」

「ああ。」

どうやら毬も同じことを思っていたらしい。

少年は親に連れていかれた。

そのあと、アーシアの過去について聞いた。

……なんだよそれ……

「酷いねそれ……。」

毬とは考えがよく合う。

やはり、兄妹だからか？

そう思っていると、教会に近づいてきた。

「うっ……。」

なんか、すごい悪寒を感じた。

毬は、怖いのかブルブル震えている。

「大丈夫か毬？（小声で）」

「うん……。」

そうとは気付かず、アーシアは、

「ありがとうございます。イツセイさん達に会えたのも、髪のお導きのおかげでしょう！おお！神よ！」

ぐわっ！アーシアがお祈りしたため、激痛が走る！

いってー！！！！

毬も頭を抱えている。ここは兄である俺が何とかしなければ！

「アーシア。大丈夫だから早く行きなよ。（俺たちのために！）」

「え？あ、はい！本当にありがとうございます！」

そう言つてアーシアは教会へと、走って行った。

俺らは急いでそこから離れた。

あー。死ぬかと思つた……。

5・悪魔とシスター（後書き）

毬「怖かったよ〜お兄ちゃん〜。」

一「ハイハイ。怖かったな。」

君「さて次はいよいよ、バトル！」

毬「え？そうなの？」

一「聞いてねえよ！」

君「毬の駒もわかります。次回『闇に潜みし影は……』お楽しみに！」

毬「気になる……。」

一「同感。」

6・闇に潜みし影は・・・（前書き）

かなり遅れました。

アドバイスをもらい出来る限り読みやすいように調節させてもらいます。

問題があったら言うてください。誤字が多いかもしれせん・・・。

6・闇に潜みし影は・・・

Mariside・・・

「二度と教会に近づいちゃダメよ」

私やお兄ちゃんが本格的に悪魔稼業を開始して数日がたったある日の夜。とてつもなくご立腹な様子のリアス部長がお兄ちゃんに言い放つ。

「教会は私たち悪魔にとって敵地。踏み込めばそれだけで神側と悪魔側の間で問題になるわ。」

今回はあちらもシスターを送ってあげたあなたの厚意を素直に受け止めてくれたみたいだけど、天使たちはいつも監視しているわ。いつ、光の槍がとんでくるかわからなかったのよ？」

え！？そうだったの？そう思うと・・・ブルツ・・・

五体満足でよかった〜（汗）

お兄ちゃんもそう思っているのか、足が少し震えているし・・・。にしても、リアス部長の怒り方が半端ない。

そんなに危険だったんだ・・・。

「教会の関係者にも関わってはダメよ。特に『悪魔払い』は我々の仇敵。」

神の祝福を受けた彼らの力は私たちを滅ぼせるほどよ。神器所有者が悪魔払いなら尚更。

もう、それは死と隣り合わせのと同義だわ。イツセー」

「は、はい」

すごい眼力・・・

「人間としての死は悪魔への転生で免れるかもしれない。けれど、悪魔払いを受けた悪魔は完全に消滅する。無に帰すの。」

無。何もなく、何も感じず、何も出来ない。それがどれだけのことかあなたはわかる？」

無って、想像できないな。

想像できたら無じゃないし（笑）

「ゴメンなさい。熱くなりすぎたわね。とにかく、今後は二人とも気をつけてちょうだい。」

「は、はい！」

「了解です！」

もう出来たら二度と近づきたくないな。

もちろん、お兄ちゃんが教会に何かされたら、絶対ぶっ潰して消滅させてやるけどね

「あらあら。お説教はすみましたか？」

「おわっ」

「キャッ」

いつの間にか朱乃先輩が後ろにいた。びっくりした・・・。

「朱乃、どうかしたの？」

というリアス部長の問いかけに少し顔を曇らながら朱乃先輩が言う。

「討伐の依頼が大公から届きました」

はぐれ悪魔。

そういった存在があるらしい。

爵位持ちの悪魔に下僕にしてもらった者が、主を裏切り、または主を殺して主なしとなる事件が極稀にあるらしい。

それで、そういった野良犬？による被害を最小限に抑えるために、見つけだして、主人、もしくは他の悪魔が消滅させるのがルールだということらしい。

これは、天使や墮天使側でも言われていることらしくてはぐれ悪魔がいたらみつけしだい殺すということらしい。

お兄ちゃんはそういう物に間違えられて殺されかけたらしい。

うん。ハタ迷惑極まりないね。この世から消し去ってやらなくちゃというわけで、私たちオカルト研究部一同。

町外れの廃屋近くにきてまーす！！テンション高いって？

だって、怖いからテンション上げなくちゃ怖くて泣いちゃいそうなの！

なんでも、ここで毎晩はぐれ悪魔が人間をおびき寄せて食ってるらしい。

怖い……………。

『リアス・グレモリーの活動領域内に逃げ込んだため、始末してほしい』

って、いうのが偉い人から届いたものだから、こうしてクエストを受託して目的地へ向かっているんです。

時刻は深夜。辺りには背の高い草木が生い茂っていて、そのさきに廃屋が見える。

見えないのも恐怖だけど、見えても恐怖って……。

「……血の臭いがしますね」

木場君がそう言った。

え！？そんな怖いこと言わないでよ！

「……はい」

隣にいた子猫ちゃんは制服の袖で鼻を覆っている。

「イツセー、マリ。2人にはちょうどいい機会だから悪魔としての戦いを経験しなさい」

そのリアス部長の一言に少し驚く。

そんな！こんな怖いところで戦えって……。

無理無理！！絶対無理！！！！

「大丈夫。流石に戦わせないわ。でも、悪魔の戦闘を見ることはできるわよね？

今日、2人は私たちの戦闘をよく見ておきなさい。そうね、ついでに下僕の特性を説明してあげるわ」

「下僕の特徴？説明？」

怪訝そうな表情を浮かべながらお兄ちゃんがリアス部長を見る。
よくわからない。どういう意味？

「主となる悪魔は、下僕となる存在に特性を授けるの。
・・・そうね、頃合だし、悪魔の歴史を含めてその辺を教えてあげるわ」

そういつて私とお兄ちゃんに現在の悪魔の状況を説明し始めた。

「大昔、我々悪魔と堕天使、そして天使を率いる神は三つ巴の大きな戦争をしたの。

大軍勢を率いて、どの勢力も永久とも思える期間、争い合ったわ。
その結果、どの勢力も酷く疲弊し、勝利する者もないまま、戦争は数百年前に終結したの」

リアス部長の言葉に木場君が続ける。

「悪魔側も大きな打撃を受けてしまった。

二十、三十もの軍団を率いていた爵位を持った大悪魔の方々も部下の大半を長い戦争で失ってしまったんだ。もはや、軍団を保てないほどにね」

次に朱乃先輩が口を開ける。

「純粋な悪魔はそのときに多く亡くなったと聞きます。

しかし、戦争は終わっても、堕天使、神との睨み合いは現在でも続いています。

いくら、墮天使側も神側も部下の大半を失ったとはいえ、少しでも隙を見せれば危うくなります」

「そこで悪魔は少数精鋭の制度を取ることにしたの。それが『イーヴィル・ピース悪魔の駒』」

リアス部長の話で気になる単語が出る。

「イーヴィル・ピース？何ですかそれ？」

お兄ちゃんも疑問に思ったらしく、首をかしげている。

「爵位を持った悪魔は人間界のボードゲーム『チェス』の特性を下僕悪魔に取り入れたの

。下僕となる悪魔の多くが人間からの転生者だからって皮肉を込めてね。

それ以前から悪魔の世界でもチェスは流行っていたわけだれど。それは置いておくとして。

主となる悪魔が『王』。私たちの間で言うなら私のことね。

そして、そこから『女王』、『騎士』、『戦車』、『僧侶』、『兵士』と五つの特性を作り出したわ。

軍団を持ってなくなった代わりに少数の下僕に強大な力を分け与えることにしたのよ。

この制度をできたのはここ数百年のことなのだけれど、これが意外にも爵位持ちの悪魔に好評なのよね」

「好評？チェスのルールで？」

「競うようになったのよ。」

『私の騎士は強いわ！』、『いえ、私の戦車のほうが使える！』っ

て。

その結果、チェスのように実際のゲームを、下僕を使って上級悪魔同士で行うようになったのよ。

駒を生きて動く大掛かりなチェスね。私たちは『レーティングゲーム』と呼んでいるけれど。

どちらにしても、このゲームが悪魔の間では大流行。今では大会も行われているくらいだわ。

駒の強さ、ゲームの強さが悪魔の地位、爵位に影響するほどにね。

『駒集め』と称して、優秀な人間を自分の手駒にするのも最近流行っているわ。

優秀な下僕はステータスになるから」

つまり、偉い人の娯楽のために人生狂わされる奴が出てきちゃうってことなんだ。

そんなに自分の荣誉や評価が大切な？

「そのゲームにはもう部長たちは出たりしてるんですか？」

とお兄ちゃんがリアス部長に向けて質問をぶつける。

「私はまだ成熟した悪魔ではないから、公式な大会などには出場できない。

ゲームをするとしても色々な条件をクリアしないとプレイできないわ。

つまり、とうぶんはイツセーヤマリ、ここにいる私の下僕がゲームをすることはないってことね」

「じゃあ、木場君たちもそのゲームをしたことはないってこと？」

「うん」

うん。無理。

私はお兄ちゃんにしがみつく。

お兄ちゃんは私がこうというのが苦手なのを知ってるから頭をなでてくれた。

（あゝ落ち着く。）

落ち着いたところでさらに細かくみてみると、両手には獲物としての槍が一本ずつ。

下半身は四本足があり、すべて太く、爪も鋭い。尾には蛇が見える。大きさも五メートルは軽くある。

うん、正真正銘の『見た目バケモノ』。何で人の格好しないのかな・・・。

私が戦えないじゃない！！

「主のもとを逃げ、己の欲求を満たすためだけに暴れまわるのは万死に値するわ。」

グレモリー公爵の名において、あなたを消し飛ばしてあげるわ！」

「ごさかしいいい！小娘ごときがああ！その紅の髪のように、おまえの身を鮮血で染め上げてやるわああああ！」

死亡フラグ見事に建てましたね。

「雑魚ほど洒落のきいたセリフを吐くものね。裕斗！」

「はい！」

リアス部長の呼びかけで木場君が飛び出す。

うわー、速いなあ。

「イツセー、マリ。さっきの話を続きをするわ」

話？

特性がどうってやつ？

「裕斗の役割は『騎士』、特性はスピード。『騎士』となったものは速度が増すの」

リアス部長の言うとおり、木場君の動きは徐々に速くなる。

すごく速い。人外の方は……。ただ振り回してるだけだね。

あれじゃ、あたるものも、あたらないよね。

「そして、裕斗の最大の武器は剣」

そして、足を止めた木場君の手には鞘に収まった西洋剣が握られていた。

あれ？ 剣なんて持ってた？

木場君はそのまま剣を鞘から抜く。そして、再び走り出す。

そして敵が認識するよりも速く、両腕を切り落とした。

「ギヤアアアアアアアアアアっ！！」

人外の悲鳴が木霊し、両腕から鮮血が飛び散る。

「これが裕斗の力。目では捉えきれない速力と、達人級の剣さばき。ふたつが合わさることで、あの子は最速のナイトとなれるのよ」

確かに、すごいと思う。

悲鳴を上げる人外の足下にはいつの間にか、子猫ちゃんが立っている。

「次は小猫。あの子は『戦車』。戦車の特性は」

「小虫めええええつつ!!」

その言葉と同時に、人外はチビスケを踏み潰しにかかる。

「危ないっ!!」

私はつぶされると思っただけで目を手で覆った。

でも、つぶれる音がしない。

恐る恐る見てみると、人外の足は地面につくことはなく、子猫ちゃんに全衝撃を受け止められた。

え？うそ！？子猫ちゃんが受け止めてる！

「『戦車』の特性はシンプル。バカげた力。屈強なまでの防御力。無駄よ。あんな悪魔の踏みつけたぐらいでは小猫は沈まない。潰せないわ」

だからあんなにすごいんだ！

グンツ!!

完全に人外の足を持ち上げてどかす子猫ちゃん。

「……ふっ飛べ」

子猫ちゃんは空高くジャンプし、人外の腹に拳を打ち込む。拳の威力に人外の体が後方に吹き飛ぶ。

すごいパンチ……。

お兄ちゃんは子猫ちゃんのパンチヲを拝もつと凝視している。
はぁ……。お兄ちゃんは……。
私はお兄ちゃんの足を踏んでやった。……こっちに顔を向けるく
らいの強さで。

「最後に朱乃ね」

「はい、部長。あらあら、どうしようかしら」

朱乃先輩が笑みを浮かべながら、さっきの一撃で倒れこんでいる人
外のもとへ歩みだす。

「朱乃は『女王』。私の次に強い最強の者。

『兵士』、『騎手』、『僧侶』、『戦車』、すべての力を兼ね備え
た無敵の副部長よ」

「ぐううう……。…」

近づいてきた朱乃先輩を睨みつける人外。それをみてまた笑みを浮
かべる。

「あらあら。まだ元気みたいですネ？それなら、これはどうでしょ
うか？」

そういつて朱乃先輩が天に向かって手をかざす。すると

カッ！

文字通り、天からの一撃。人外に雷が落ちた。

「ガガガガッガガガッガガガッ！」

それを受けて苦悩な声をだす人外。
びっくりした。

「あらあら。まだ元気そうね？まだまたいけそうですわね」

カッ！

再び雷がうち下ろされる。

あ、あの〜。そろそろいいのでは・・・？

「ギヤアアアアッ！」

それを受け、また声をあげる人外。

これで終わったかと思ったら、三発目が落下する。

「ゲアアアアアアッ！」

え、もう許してあげようよ・・・。

「朱乃は魔力を使った攻撃が得意なの。

雷や氷、炎などの自然現象を魔力で起こす力ね。そして何よりも彼女
は究極のSよ」

・・・少し怖さが強まった。・・・別の意味で。

「普段、あんなにやさしいけれど、一旦戦闘となれば相手が敗北を
認めても自分の興奮が収まるまで決して手を止めないわ」

・・・怖い・・・。

私はお兄ちゃんにくつついて震えていた。

「・・・うう、朱乃さん。俺、怖いっス」

お兄ちゃんも怖いらしい・・・。

「怯える必要はないわ、イツセー、マリ。朱乃は味方にはとてもやさしい人だから、問題ないわ。

あなた達のこととてもかわいいと言っていたわ。今度甘えてあげなさい。

きつとやさしく抱きしめてくれるわよ」

「うふふふふふ。どこまで私の雷に耐えられるかしらね？

ねえ、バケモノさん。まだ死んではダメよ？トドメは私の主なのですから。オホホホホッ！」

それから数分間、朱乃先輩のSMショーが続いた。

朱乃先輩が一息ついたのを確認したらリアス部長が完全に戦意がなくなつた人外のもとへ歩き出す。

そして、地面に突つ伏す人外に向かって、リアス部長は手をかざす。

「最後に言い残すことはあるかしら？」

慈悲深い・・・。

「殺せ」

人外の小さく声を発する。

「そう、なら消し飛びなさい」

すると、リアス部長の低い、冷たい声音とともにどす黒い魔力の塊が手のひらから撃ち出される。

塊は人外の全身を包み込み。そして、魔力が宙に消えたとき、人外の姿も完全に無かった。

文字通り、塵も残らなかつた。

「終わりね。みんな、ご苦労さま」

少し人外に同情した。だって、レクチャーのためだけにあれだけなぶられたのだから……。

しかし、これが悪魔の戦い……。少し怖いけどその分やる気がわいてきた！

でも、なんか忘れてる気がする……。あ、そうだ。

「リアス部長、聞きそびれたんですけど」

「何かしら？」

「私やお兄ちゃんの駒……。下僕としての役割はなんなんですか？」

「あ、そうだったそうだった。部長、どうなんですか？」

思い出したようにお兄ちゃんも聞いてくる。

リアス部長ははっきりと言った。

「マリ、イツセー。あなた達は『兵士』よ

私たちは、どうやら一番下らしい。

とりあえず頑張らなくちゃね！

6・闇に潜みし影は・・・(後書き)

毬「お兄ちゃん！同じ駒だし、頑張ろうね。」

一「おう！そうだな！」

君「喜んでもらえて何より。さて次回『はぐれは何を見て笑っ』」

毬&一「おたのしみに！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6834z/>

ハイスクールD×D 兵藤家の妹？

2011年12月26日23時52分発行